

## 研究・調査報告書

|  |                     |
|--|---------------------|
| 報告書番号  | 担当                  |
| 199  | 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 |
| 題名 (原題/訳)  |                     |
| <p>How do quantities drunk per drinking day and the frequencies of drinking those quantities contribute to self-reported harm and positive consequences?</p> <p>1日あたりの飲酒量と飲酒頻度が自己申告された害と良い影響ほどの程度なのか？</p>  |                     |
| 執筆者  |                     |
| Mäkelä P, Mustonen H.  |                     |
| 掲載誌 (番号又は発行年月日)  |                     |
| Alcohol Alcohol. 2007 Nov-Dec;42(6):610-7  |                     |
| キーワード  |                     |
| 個人、集団、自己申告、飲酒量、飲酒頻度  |                     |
| 要 旨  |                     |
| <p>目的：</p> <p>個人と一般集団のそれぞれにおいて、一人当たりの1日の飲酒量と飲酒頻度が与える害と良い影響がどの程度なのかを調査すること。</p> <p>方法：</p> <p>15歳から69歳の飲酒男性を母集団の対象とし、2000年に実施した(回収率は78%でN=1760)。有害なタイプを自己申告制で調査した。そのタイプとは、自分で制御できない飲酒をするという心配、個々の飲酒機会の否定的な結果、飲酒に対する他人の反応である。</p> <p>結果：</p> <p>飲酒がとても多いと回答した者(男性では13ドリンク以上、女性では8ドリンク以上)では、有害な影響を及ぼす危険が高い事グループになる事がわかった。</p> <p>一般集団では男性は8~12、女性は5~7、3~4の飲酒が最も問題であるとしたものが高かった。男性では5~7、女性では3~4の飲酒を超えると、良い影響を及ぼすという結果は得られなかった。</p> <p>まとめ：</p> <p>一般集団においてリスクが高いとされた飲酒量は、個々のレベルでリスクが高いとされた飲酒量よりも低かった。なぜならば、飲酒の割合は個々のレベルよりも集団の割合の方が低いからである。</p> <p>将来、研究では個々のレベルで特定の飲酒量と特定の飲酒をする頻度双方において、そしてまた一般集団においても飲酒パターンが与えるリスクについてどの程度の割合か、注目されるであろう。</p> |                     |